

震災避難者交流会の実態調査

- 子どもを対象とした交流会のあり方をめぐって -

○持田隆平¹・白石優子¹・平田修三¹・石島このみ^{1,3}根ヶ山光一²

(1 早稲田大学大学院人間科学研究科・2 早稲田大学人間科学学術院・3 日本学術振興会)

<要 旨>

東日本大震災により、多くの被災者が避難生活を送っている。そうした動きを受け、避難者と支援者、そして避難者同士が関係を築く場として各地で交流会が立ち上げられた。本研究では、震災から2年が経過した時点までの避難者と交流会の関係を探るために、埼玉県に避難している被災者の交流会の実態について調査した。また、交流会に参加していたものの足を運ばなくなった避難者への聴き取り調査を併せて行った。本研究では、とくに交流会における子どもの様子に注目して検討した。

その結果、震災後2年では、交流会参加者の年代別構成をみると、避難実態に比べて高齢者や中年層の参加者が多く、子育て世代の参加が少ないこと、サービスを受ける一方で子どもがあまり主体的に活動できるプログラムが用意されていないために、交流会に足を運ばなくなった避難者がいること、などが明らかになった。避難が長期化するなか、今後は、子どもの発達という観点から中長期的な展望に立った支援プログラムを用意する必要があると思われた。

<キーワード> 震災交流会 支援 実態調査 避難家族 避難児童

【はじめに】

2011年3月の東日本大震災の発生以降、津波被害や原発事故により、長期的に元のコミュニティからの離脱を強いられたケースが多数みられた。現在、全国で約30万人の被災者が避難生活を送っているとみられる(復興庁, 2013)。筆者らは「かささぎプロジェクト」(2011年6月～)を立ち上げ、関東への避難者に対して調査・支援を行ってきた。

避難先で避難者同士あるいは支援者と関係を築く場の一つとして震災避難者の交流会(以下、交流会)があり、筆者らの地元である埼玉県では、2013年5月の時点で20近くの交流会が活動していると言われている。埼玉県の避難者の実態について、震災直後では子育て世代の母子が多く避難していることや(辻内ら, 2013)、保護者が避難先での子どもの適応を懸念していることが指摘されている(平田ら, 2012)。また、埼玉県に避難している福島県民を対象に2012

年3月~4月に辻内(2012)が行った調査によると、交流会に参加したことがないと答えた避難者は76.6%にも及んでいた。さらにその理由は「知らない」(33.2%)、「近くにない」(22.6%)、「知り合いがいない」(17.1%)、「都合が合わない」(14.5%)、「参加したいとは思わない」(16.8%)となっており、悩み・気がかり・困ったことを誰にも相談できないケースが全体で38.4%あった。震災後1年で、すでに自立した生活を送ることができているという理由で交流会を必要としない、あるいは交流会を離れた避難者が存在していたことが推測されるが、一方で、支援や人との繋がりを依然として必要と感じながら、なんらかの理由で交流会の場から足が遠のいている避難者も相当数存在していると推察された。

これらのことから、避難家族と地域コミュニティのつながり形成・維持について考えるため、現時点における交流会の活動状況と、交流会に

参加しようとしなない避難者の背景を把握する必要があると考えた。

以上を踏まえ、本研究では、①埼玉県を中心に震災後2年以上が経過した時点での各交流会の取り組みの多様性、活動状況やその変化を明らかにし、次に②交流会に足を運ばなくなった家族を事例に取り上げなぜ参加しなくなったのか検討する。また、こうした交流会は基本的には大人同士の交流を意図したものが多く、避難先で子どもが取り残されている可能性も考えられたため、③子どもの参加という観点から現行の交流会の内容について検討し、子どもにとっての交流会の意味を考える。

方法

I. 交流会主催者を対象とした質問紙調査

実施期間：2013年4月～5月。

方法：震災後に関東で立ち上げられた交流会の活動状況を知るため、埼玉県で活動している民間の交流会16団体の主催者16人に質問紙を配布し、12人から回答を得た(回収率75%)。質問紙の郵送は、電話による連絡のついた交流会主催者に趣旨を説明後、承諾を得たうえで行った。

質問項目：立ち上げの経緯や参加者の構成、活動内容、参加する大人や子どもの様子とその変化、今後の展望等を中心とした。

II. 交流会に参加していたものの足が遠のいた家族への聴き取り調査

実施期間：2013年3月。

対象：埼玉県に避難している避難者E夫妻に、約1時間15分の半構造化インタビューを実施した。行政が把握する避難者に関する情報へのアクセスは、個人情報保護の観点から厳しく制限されており、交流会に足を運ばない避難者と出会うことは極めて困難であった。そこで、筆者らが調査・支援の一環として実施している「人形劇創作プログラム」(2012年

11月～)に参加しており、以前に他の交流会に参加していたものの足を運ばなくなっていたE夫妻に調査協力を依頼し承諾を得た。

質問項目：避難の経緯、交流会に参加しようと思いついた動機や次第に足が遠のいていった経緯について尋ねた。

III. 子どもの参加する交流会の視察

実施期間：2012年11月から2013年6月。

対象：子どもにとっての交流会の意味について検討するため、筆者らが足を運んだ交流会のなかから、毎回乳幼児と小学生の参加が見られた交流会Aと交流会Bを事例として取り上げる。なお、フィールドエントリーに際しては、交流会主催者に連絡し調査の趣旨を伝え、承諾を得た。

方法：活動内容と子どもの様子、スタッフから聞いた子どもの様子の変化についてのメモを資料とした。

倫理的配慮

Iの質問紙調査については、結果の公表に伴うプライバシーの保護に十分配慮した。IIの聴き取り調査とIIIの交流会視察については、早稲田大学倫理委員会の審査を経たうえで実施した。

結果と考察

I. 埼玉県内の交流会の実態

はじめに、今回の調査対象となった12の交流会について、参加者の構成と活動内容の特徴を紹介する。平均参加人数は、全体で21人、男女別では男性9人、女性14人であった。男女ともに最も参加が多いのは老年世代であり、次いで多いのは中年世代であった。また、交流会当日の運営を手伝う支援者とスタッフの人数は、回答のあった10件に関し1人～4人未満(4件)、5人～9人未満(5件)、30人以上(1件)であった。

次に活動内容とその変化について複数回答可で尋ねた。今回調査した各交流会には立ち上げ

時期にばらつきがあったため、交流会を大きく「2012年3月以前に立ち上げられた群」（8団体）と「2012年3月以降に立ち上げられた群」（4団体）に分けて比較検討した。その結果、「2012年3月以前に立ち上げられた群」では、発足当初は「情報提供」（8件）、「交流サロン・カフェ」「個別相談」「地域の人と交流」（各5件）といった活動が多く、調査実施時点では「情報提供」「地域の人と交流」各8件、「交流サロン・カフェ」（7件）、「観劇・公園や観光地に出掛ける」（6件）が多く取り組まれていた。発足当初に比べ、運動や外出など体を動かす活動やレクリエーションなどが増加し、とくに「地域の人と交流」は新たに3団体が取り入れており最も増加していた。「2012年3月以降に立ち上げられた群」では、初期の活動では「交流サロン・カフェ」（4件）、「情報提供」（3件）が多く、現在では新たに「観劇・公園や観光地に出掛ける」「カルチャースクール」を取り入れる団体が見られ、「地域の人と交流」が増加していた。

これらの結果から傾向を読み取ることは難しいが、立ち上げ時期に関わらず「交流サロン・カフェ」「情報提供」は交流会の主要な活動として取り組まれ、時間の経過とともに屋外での活動や体を動かすアクティビティが取り入れられるようになってきていると思われる。また、「地域の人との交流」が大きく増加していることは、避難者の心情に何らかの変化が生じている現れであるように思われた。

また、活動内容を決める際に重視することを複数回答可で尋ねたところ、「2012年3月以前に立ち上げられた群」では、調査時点で「見聞きした参加者の声（6件）」、「スタッフとの打ち合わせ（7件）」、「参加者の様子（6件）」などが多く選ばれていた。また、発足当初に比べ、現在では「他の交流会の情報」「地域の人声」に注意が払われるようになっているようである。「2012年3月以降に立ち上げられた群」も、発足当初から「見聞きした参加者の声」、

「スタッフとの打ち合わせ」、「参加者の様子」が重視されていた。

続いて交流会に足を運ぶ子どもの状況について、乳幼児と小学生以下の子どもが参加すると回答した交流会を抽出したところ8団体あり、平均参加人数は乳幼児が4人、小学生が6人であった。活動中の避難児の様子については複数回答可で尋ね、有効回答7件について検討したところ、交流会での子どもたちの過ごし方で最も多かったのは、「交流会で出会った友達と遊ぶ」（6件）であり、次いで「食べて楽しむ」「（催し等を）見て楽しむ」「創作する」「保護者の傍で過ごす」「大人と遊ぶ」各4件が続いた。

以上を総合して考えると、交流会では、参加者の意見を取り入れつつスタッフ同士が打ち合わせを重ねて活動内容が決められており、2013年3月時点では、避難者同士の交流や情報交換に加え、参加者がより楽しめる要素や、地域住民との交流を活動に取り入れている様子がうかがえた。また、交流会に足を運ぶ子どもは、用意された催しに興じる一方で、会場で出会う人々と交流することが多く見られるということが明らかになった。

Ⅱ. 交流会に参加しなくなった家族の事例

まず、対象事例の特徴を示すために（i）E家が置かれている背景を簡潔に記し、次にE夫妻による交流会をめぐる語りのなかから、（ii）交流会に期待することと、（iii）参加しなくなった理由が語られている部分を取り上げ、考察を加えていく。

（i）E家の置かれている状況

E家は、2011年3月11日の発災後すぐに夫妻と子ども4人の家族6人で埼玉県に避難してきた。夫妻の親はそれぞれ震災後も福島に留まり生活を送っている。夫は避難先で職を得、ある程度生活が安定していた。インタビューは震災から2年が過ぎた時点で行われ、E夫妻は、高齢になる

親の下へ帰郷するか子どもの進路の選択肢の多い避難先に留まるかという家族の将来を見据えた難しい決断を迫られていた。また、E夫妻には障害を持つ子どもがおり、一家が埼玉に避難後、福島で世話になっていた施設の職員から、東北に来るよう誘われていた。しかし、提示された条件が夫は現在の避難先に留まるというものであるため、妻に、家族が別離することへの躊躇が生じていた。

また、2013年3月時点での避難先での生活について、家族内において人間関係の拡がりに差が認められた。子どもたちは休日に遊んだりする友達はいないものの、学校生活を送るうえで不自由しない程度には同級生と関係が築けており、夫も避難先で就いた仕事の職場で、新たな人間関係が築かれていた。しかし、妻は、悩み事を相談できる相手がおらず、避難先で人間関係を築くことに幾分及び腰であり、今後の居住地が決まらないことが一因していると考えられた。

以上のような背景をもつE家が、避難後に交流会に一時は参加したもののやがて足を運ばなくなった経緯について、以下、交流会に期待していることや足を運ばなくなった理由に注目しながら検討していく。

(ii) 交流会に期待すること

【子どものストレス発散及び家族の人間関係構築の場】

震災による避難者は支援物資や被災地の情報収集など各々の必要性があつて交流会に足を運んでいると考えられる。E家の場合は、埼玉県に避難してから、被災地での生活習慣が変化したことが参加の契機となっていた。

次の語りでは、福島で生活していた頃のE家の余暇の過ごし方と避難生活開始後の様子の変化について言及されている。

妻：福島にいた時には、土曜日、日曜日はけっこうその療育施設にみんなで通ってたんですね。一緒に通って、コミュニケーションの取り方とか、そういう勉強をしてたんですね。私も（そこで講師の）仕事をしていたので一緒に連れて行って。で、こっちにきて土日時間を持って余すようになって。で、学校で一緒にいる友達はいても、休みの日に遊ぶ友達がいないんですよ。なので、ちょっと学校の他に、繋がりがあつたらいいかなっていうのを思ったんですね。向こうだとけっこう…ねえ、そこに、療育施設には、5~60人は土曜日集まって。いろんなことをやって。やってたりしてたんで。それが全然ないとやっぱりこうストレスがたまってきてちょっと、子どもたちも癩癩を起したりとかあつたので、なんとか発散させてあげられたらなって。っていうのはあつたし、あとはやっぱり違うところに行くと、気分転換でだけでなく、そこで友達ができたらいいいかなって。

妻の口からは、まず被災地と避難先での休日の過ごし方の違いが語られた。E家は福島で生活していたとき、土日になると、妻が講師として働く療育施設に子どもたちと通っていた。そして、施設に集まる人々と交流を重ねていたようである。しかし埼玉に避難してからは、E家の子どもは土日に時間を持って余すようになっていた。その理由として、子どもたちが避難先の学校で子どもたちが人間関係を十分に築けていないことが語られた。子どもたちは、学校生活に支障をきたすほど人間関係が希薄なわけではなかったが、休日に一緒に過ごすほどの友達がまだできていないため、余暇を家族と過ごすことが多くなり、次第にストレスが募っていった。その結果、癩癩を起すようになったと考えられる。

こうした事情から、E家は、交流会に対して、子どもたちのストレス発散の場であると同時に、

さらに学校の外で人間関係が広がるという以前の生活でいえば療育施設が担っていたような役割を求めていたことがうかがえた。

また、先述の通り、避難先での人間関係の拡がりという点で最も深刻な状況にあると考えられるのは妻であった。そのため、E家にとって交流会への参加は、子どもだけではなく、妻や夫のストレスを軽減し人間関係を広げる意味合いも少なからずあったと推察された。

E家は、避難生活を開始した2011年より、近隣で開催された幾つかの交流会に足を運んでいる。聴き取り調査のなかで参加を始めた具体的な時期や頻度は語られなかったが、2012年までの間に複数回足を運んでいたと思われる。しかし、子どもが足を運び得る範囲にあった現行の交流会では、上記のようなニーズに応えきれていなかったと思われる。以下では、E家が交流会から足が遠のくことになった経緯について述べられている語りを取り上げ、検討していく。

(iii) 交流会に参加しなくなった理由

【「お客様」であることへの不満】

次のE夫妻の語りでは、期待していた役割を交流会が果たしてくれていなかった様子が語られている。

妻：まあ最近あんまりないんですけど。行ってはいたんですけど、お客さんなんですよ。私たちは呼ばれて行って、お昼をごちそうしてもらって帰ってくる。で、なんか向こうのひと達が、カラオケを發表して、それを聞いているとか、そのいつも見る側だったんですけど、やっぱりこうやらせてあげたいっていうのがあったんで、ちょっとね…。そこですね、はい。

夫：（参加者のなかには）子どもたちもいますけど、福島とか、けっきょく避難してきた人達を対象にご招待してくれて。

妻：復興関係の人がやってくれるんですけど、結局行ってもお客さん扱いなので、他の家族との関係を作らないんですよ。みんな家族がかたまって座って食べるので。だから…

夫：食べるだけが楽しみみたいなね（笑）

妻：やっぱそれもさみしいとは思うけど（笑）

夫：でも行ったら行ったで食べることとか、お野菜とかお米とかいろいろ貰えたりとかもあるんで、子どもたちもそれはそれで楽しみはあるんですけど。

E夫妻は、以前足を運んでいた交流会に対して、食事や物資の提供に一定の評価を下していた。しかし、とくに妻の「結局行ってもお客さん扱い」という語りにみられるように、これまでにE家が足を運んでいた交流会では、子どもが主体的に活動できる、人間関係が構築できるというニーズが満たされていない状況が示唆された。

交流会に参加する避難者が受け身であることが多いという問題が存在していることは、交流会主催者側も把握し、解消すべき課題として認識されているようである。埼玉県に避難する被災者向けの情報紙「福玉便り 2013 春の号外」（2013年3月11日発行）によると、例えば、あまりに至れり尽くせりなサービスは、参加者を「却って申し訳ない」という気持ちに陥らせてしまうことがあるようである。そのため、「支援をする/される」関係からの転換を課題として挙げる交流会主催者も存在する。筆者らが交流会を視察したなかでは、こうした課題に対して、集まった参加者に、会場での受け付け係りなど何らかの役割を持ってもらい、交流会を一緒に作り上げていくという側面を強調する団体も見られた。

E家の場合、妻の語りから、E家が参加した交流会では支援者と参加者が垂直的な関係で固定され、参加する避難者は一方向的にサービス

を受けていた様子が見ええる。さらに下線部の語りより、そのことが却って他の参加者との関係を築くことを阻害していたと推測された。

「避難者同士でもっと交流したい」という意見も、我々の視察のなかで避難者の声として参加者や主催者からしばしば聴かれた。交流会では基本的に避難者と支援者が一堂に会するが、こういった参加者の声を受けて、避難者だけが集まり避難者同士が本音で語り合う時間を設ける団体も出てきた。こうした動きがあるということは、E家のようなニーズのあった避難者が、他にも少なからず存在していたことを示唆していると考えられる。

しかし、それにもかかわらず、参加した子どもが主体的に活動することができるプログラムを用意している交流会は、あまりないようである。E家のように、子どもを主体的に活動させてあげたいという家族に交流会が対応するにはどんな取り組みが必要であるか検討するために、次に、埼玉県内の子どもの参加が見られる交流会の活動の様子を見ていく。

Ⅲ. 交流会の参加する交流会3態

ここでは、毎回子どもが参加する交流会A・Bを視察したなかで、実際に見聞きしてきた子どもの活動の様子から、交流会に参加する子どもの様子から子ども向けの交流会のプログラムについて検討する。

(i) 子どもを対象にした催し・プログラムがない交流会A

他の交流会の参加者が特定の年代に集中することが多いのとは異なり、交流会Aには小学生以下の子どものみならず80代までの幅広い年代がみられ、参加人数も毎回約30人と他の交流会に比べ大人数の参加者が集まっているのが特徴である。

交流会Aにくる子どもの多くは、親が参加するので一緒についてきた、あるいは連れられてきたという場合が多いようである。毎回、平均し

て小学生5人、乳幼児5人の10人前後の子どもが参加しており、大人が活動しているあいだは、部屋の隅できょうだい同士で遊んだり折り紙を折るなどして過ごしていた。交流会Aは、3回目（2013年5月）の活動で保育ボランティアが導入されるまでは、子どもを対象としたプログラムは取り入れられていなかった。そのため、2回目（2013年4月）の活動までは、子どもたちが退屈そうな様子を見せていた。また、幅広い世代が集まるものの、子育て世代は孤立しがちであった。一方で、子育て世代の連れてくる子どもを見て、震災を機に孫と離れ離れになった中年代や高齢の参加者からは「子どもがいると、いいね」「久しぶりに小さい子を見た」という好意的な声が多数聴かれた。

交流会Aは立ち上げ間もないこともあり、取り組み方や内容については参加者の声を聴きとりながら、模索している段階にある。そうした事情を考慮しつつも、2回目までの活動の様子から、子ども向けのプログラムが用意されていない交流会では、子どもたちが交流会に興味・関心を示さなくなる可能性があると思われた。そうしたなか、2013年6月の4回目の視察では、当初、室内でのおもちゃ作りなど大人の用意したプログラムに従い過ごしていた子どもたちが、やがて子ども同士で自発的に遊びはじめ、保育ボランティアや保護者に屋外での活動を要求した末に、屋外でのボール遊びに発展していく様子が見られた。教導的な大人に促されるままであった子どもが、次第に主体性を発揮し、大人とせめぎ合い、交流会の内容を変化させる過程を追い検討することは、子どもを対象としたプログラムが如何にあるべきか考える上で意味がある。筆者らは、子どもの様子をフィードバックしながら交流会Aに携わり続け、子どもの存在が交流会をどのように変容させていくか、今後の展開を見守るつもりである。

(ii) 子どもを対象にした大人主導の催し・プ

プログラムがある交流会B

次に取り上げる交流会Bは、交流会Aと異なり、子ども向けのプログラムが用意されている団体である。交流会Bは震災から2か月後の2011年5月に立ち上げられ、毎回大人が15人前後、幼稚園から小学生までの子どもが10人前後参加している。交流会Bの取り組みの特徴は、子どもが楽しんで過ごせる交流会を目指し、発足当初から近隣の高校の生徒がボランティアとして携わり、子どもの遊び相手をしていることである。以下、活動中の子どもの様子について、子どもと高校生ボランティアとの交流について、関わり方のわかるエピソードを紹介する。

交流会Bでは、子どもたちは高校生ボランティアと遊ぶことが多い。大人たちが活動している間、子どもと高校生ボランティアは隣接する児童館に移動し、子ども1人に対しボランティアの学生が1~2人付き、それぞれのグループで過ごしている。児童館の上階にある体育室でボール遊びや卓球をしたり、図書室で本を読んだりボードゲームに興じるなどして過ごすうちに、子どもも高校生もグループ間で流動的に入れ替わり、遊びも様々に展開していく。5回の訪問のなかで、日によって差があるが、会場で知り合った避難児同士でボール遊びをする様子も見られた。また、ある回では、避難児と高校生ボランティア全員で屋上に出て大縄跳びをすることもあった。しかし、こうした集団遊びは、特定の活発な子どもが誘導した際に限って起きており、そのような児童が不在の回では、子ども同士のやりとりはあまり活発に見ることができなかった。

交流会Bは、このように活動中は好きに遊ばせるなど子どもの過ごし方の自由度は高いが、そのために参加する子どもが今一つまとまらずに過ごしている印象も覚えた。

子ども向けプログラムの意義という点について、子どもたちからの評価として主催者から「『今度は何時?』とカレンダーにマルをつけ

て楽しみにしていたり、この頃は支援スタッフ(大人の活動を支えているスタッフ)ともハイタッチする」というエピソードが語られた。プログラムがあることで、次の参加を心待ちにしている様子がうかがえた。

(iii) 子どもを主体とした催し・プログラムを実施する交流会C

E家は筆者らが2012年11月より実施している人形劇創作プログラムに参加し、子どもたちは2013年5月に都内で開催された人形劇イベントに出演した。以下では、人間関係を広げたいというE家のニーズに、筆者らが「地域住民との継続的な人形劇の制作・練習」という形で応えたことがもたらす意味を探るため、参加当初より現在に至るまでのE家の様子の変化について一部を紹介する(人形劇創作プログラムの詳細については別の機会に報告する)。

人形劇創作プログラムは筆者らが震災以降行ってきた調査・支援から得た知見(平田ら, 2012)を踏まえて企画され、避難家族と地域の子どもの中心に同じ目標に向かって継続的な作業・活動をすることで子どもの情動表出を促しつつ、人間関係を広げることが目的とした実践である。時期により「導入期」、「人形劇制作期」、「けいこ期」、「目標達成期」と段階に別けて実施された。上述のE家は2012年12月より参加しており、E家以外に地域の3家族が参加し、うち2家族はもともと知り合い同士の間柄であった。

参加当初のE家は会場で家族単位で行動することが多く、夫妻も子どもたちも他家族と会話をする様子はほとんど見られなかった。そのような状態は「人形劇制作期」まで続いた。しかし、「けいこ期」「目標達成期」に入り、人形劇発表会に向けて子どもたちが練習を重ねるうちに、子どもたちが徐々に他児童らと互いの演じる役の動きやセリフ回しを教え合う様子も見られるようになった。

また、別のある児童は、当初は同じ部屋にい

る保護者のことを気にして何度も探すような仕草を見せていたが、次第に人形の制作や劇の練習に集中するようになり、やがて、わざとおどけるような真似を見せ、会場の雰囲気盛り上げ役になった。さらに、休憩時間に子ども同士で追いかけっこをしたり、自然と雑談を交わすようになっていった。

最終的に、この取り組みは、子どもが自ら能動的に活動するプログラムとして成功した。E家も、子どものストレス発散と人間関係を広げるという要請に合致したプログラムとして、ほとんど欠席もなく、最後まで脱落することなく積極的に参加を続けた。

(i)(ii)の交流会と(iii)の形態の違いは、子どもを中心に据え、子ども自ら主体的に一つの目標を目指した取り組みという点にある。(iii)の活動形態は人間関係を広げるというE家が求めていたニーズに合致していたと思われた。被災家族の適応過程は、①震災直後の生存確保、②日常生活のペースを取り戻してからの当座の生活の安定、③生活の安定をふまえた長期的な人生の展望という経過を経た(根ヶ山ら, 2012)。避難の長期化ともなると、幼児・児童の仲間関係の形成不全が将来にわたって引きおこす不適応が懸念されるなか、今後子ども向け交流プログラムの必要性が叫ばれるようになることが予測される。その点において、この人形劇創作プログラムは一つのモデルになると思われた。

総合考察

本研究では、震災から2年が経過した時点での震災交流会の実態調査と交流会に参加していなかった避難者への調査を行った。とくに本研究では、子どもの参加する交流会の視察で見聞きした事柄と筆者らのグループが実施した交流会の成果から、避難児にとって交流会の持つ意味を考えた。その結果、現行の交流会は避難実態に比べて高齢者や中年層の参加者が多く、子育て世代の参加が少ないことが明らかになった。

また、交流会に参加しなくなった避難者の語りから、支援者と参加者の関係が垂直的な関係で活動する交流会の在り方では、個別のニーズに応えきれていない可能性があることが示唆された。

次に、避難生活を送る子どもにとって、交流会が担うべき役割について、今後子どもたちに起こり得る問題を視野に入れて意見を述べる。事例のE家の子どものように、転入した学校で人間関係を十分に築くことができず、ストレスを抱えている避難児は、避難児全体でも決して少なくない数、潜在していると想定しておく必要があるだろう。震災から2年が経ち、交流会に参加する子どもは減少しているという声もある。そうした変化は、学校で友人ができたために交流会にくる必要がなくなったとしばしば好意的に解釈される。しかし、そのような、いわば元気になり交流会を離れた子どもたちではなく、同じように交流会に姿を見せないが、避難先での生活に問題を抱える児童にこそ目を向けなければならない。実際に、筆者らは調査のなかで、避難後に転入先の学校でいじめに遭い不登校になったケースに出会っている。また、学校になじめずにふさぎ込みがちになったが、交流会で同郷の人々と過ごすことで元気になった子どものケースにも出会ってきた。避難児が何らかの理由で不登校になった場合、経済的に大きな制約を被る避難生活において、有料のフリースクールなどの利用は難しく、一般の不登校の事例以上に多重の困難を抱えることになると思われる。交流会は、そうした何らかの不適応を抱えた子どもを受け入れる役割を担う社会的に重要な場所の一つになり得ると思われる。

俗に「中一ギャップ」と呼ばれることもあるように、不登校生徒数は小学6年生から中学1年生になると約3倍に急増するため(文部科学省, 2012)、避難している小学生以下の子どもが現時点では適応的であるからといって、楽観視ばかりしてはならない。今後、彼/彼女たち

が不適応を起し困難に直面したときに、交流会としてできることを考える必要があるだろう。

各交流会は拠点を置く地域の特性や参加する避難者の背景を考慮に入れて活動内容を考えなければならない、故にそれぞれの交流会に求められる在り方は異なると考えられる。したがって、上述の懸念事項があることを各交流会に呼びかけつつ、実際の問題の予防などは各交流会が個々の判断で行っていくことが必要である。

筆者らの今後の展開としては、刻一刻と変化する状況のなか、避難者が必要とする支援と、どうすればそれに応えられるかを引き続き検討していく。とくに、今回の調査で取り上げたE家のように、多重な困難を抱えるケースにとって交流会が果たす役割や他者と交流するという意味について、継時的な聴き取り調査を通して考えていきたい。

引用文献

辻内琢也.(2012). 埼玉県震災避難アンケート調査集計結果報告書(第3報改訂版). 第10回埼玉県震災対策連絡協議会.2012.8.27

辻内琢也・増田和高・永坂春華・山下奏・山口麻耶・南雲四季子.(2013). 原発避難者の社会的苦悩一寄り添い支援の大切さ、ガジュマル的支援のすすめ: 一人ひとりのこころに寄り添う, 早稲田大学ブックレット<「震災後」に考える>.早稲田大学出版:東京,45-82

根ヶ山光一・平田修三・石島このみ.(2012). 原発事故による避難家族への支援, 臨床発達心理実践研究, 7.

平田修三・根ヶ山光一・石島このみ・持田隆平・白神晃子.(2012). かささぎプロジェクトによる震災避難家族の支援 人間科学研究, 25, 265-272.

『福玉便り春の号外』.2013年3月11日発行.
「避難」の今とこれから 避難者グルー

プリーダ―座談会」

復興庁.(2013). 全国の避難者等の数(所在都道府県別・所在施設別の数).平成25年6月18日公表.

<http://www.reconstruction.go.jp/content/20130618_hinansha.pdf>(2013/6/28アクセス)

文部科学省.(2012).平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査.平成24年9月11日公表.<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf>(2012/10/25アクセス)

謝辞

本調査の趣旨に理解を示し、活動中の視察と質問紙の回答に快く協力して下さった埼玉県内の震災交流会主催者をはじめ、交流会に携わる支援者の皆様、交流会参加者の皆様、そして聴き取り調査に応じて下さったE家の皆様に心より感謝いたします。

また、本調査は根ヶ山研究室のメンバーからの多大なるご支援の下に行われました。学部生の皆様には調査に協力していただきました。白神晃子氏、米澤香那子氏、相川公代氏には、データ分析や執筆作業時に大変お世話になりました。